

聖書 コヘレトの言葉 3:11/マタイによる福音書 6:33  
説教 『一切合財を委ねる時』

ちょうど一年前、清水美穂さんが48歳で召された。彼女は自らの葬儀で読まれる聖書、旧約と新約の二箇所を示していた。今改めてこの箇所を読み、あっ、そうだったのか、と気づかされる。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる(マタイ 6:33)。「これらのもの」とは暮らしに不可欠な衣食住で、人々はその欠乏を恐れる(6:31)。

しかしイエスは、未だ来ていない明日に縛られていないで、生きている今日の輝きを徹底せよ(6:34)、と語る。だから他のことはともかくとして、「何よりもまず、神の国と神の義を求めよ」と命じた。

そうした文脈ではなく、この1節だけに注目しよう。いや1節でも多いかもしれない。美穂さんを捉えたのは「何もまず、神の国と神の義を求めなさい」という言葉ではなかったか。

続く「これらのものはみな加えて与えられる」ことは脳裏になかったと思う。それほどに神の国をひと呼吸ごとに生きていた。

すべてが「神の国と神の義」に集中している。人間の希望や無念さ、信仰や迷いの一切合財を御手に委ね、ただ神の国と義を求めた。それが一点にギュッと凝縮され、暗がりの光となった。

「人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように(エフェソ 3:19)。

この愛と豊かさを、理解するだけに留まらない。神が創造された心身のすべて、肉のすべて、骨のすべて、健やかさと病のすべてが「神の満ち溢れる豊かさ」の内に迎え入れられ、私たちは「それによって満たされる」。

心にキリストが住まい、その愛が私にも根ざして(3:17)、人の知識をはるかに超える愛を知ることになる(3:19)。

「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなされる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない(コヘレト 3:11)」。美穂さんは、旧約聖書の1節も示していた。心身も信仰も一切合財を御手に委ねる集中と、この箇所が響き合っている。

コヘレトの言葉は「生まれる時、死ぬ時、植える時、植えたものを抜く時(3:2)」と、あらゆる時を語った(3:1~8)後に「神のなされる業を～見極めることは許されていない(3:11)」と結論づける。そりゃそうだ。人間は神のなされる業を見極めない。だが、そのまま神の永遠を思い、永遠に与る(3:11)。

私たちは一人の姉妹の信仰をまぶしく仰ぐが、彼女の敬虔さが合格で私たちは不合格などと、いらぬ謙遜をしてはならない。あなたに「永遠を思う心を与えられた(3:11)」神の創造を値踏みする偽の謙りに陥らぬように。自己点数などつけていないで、ただ「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい(マタイ 6:33)」。

自分には何かしら可能性があるが、ひとまず神の国と神の義を求めておこうか、ではない。今、ここで、可能性も不可能性も、理性も感情も、健康も病も、一切合財をそこに委ねる。

姉妹の記憶が教会に刻印されている。いや、それ以上だ。召された姉妹も私たちも、永遠なるキリストの体。

「キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆく(エフェソ 4:16)」。地上と御国を横断するキリストの体として、これからも共に造り上げられていく。



《おまけのひとこと》

何よりもまず神の国と義を求めよ と言ったって暮らしを立てなくちゃ と思うなら それでいい  
そこに集中できる日が来るだろう その時になって掴み損ねても大丈夫 確実に掴まれているから